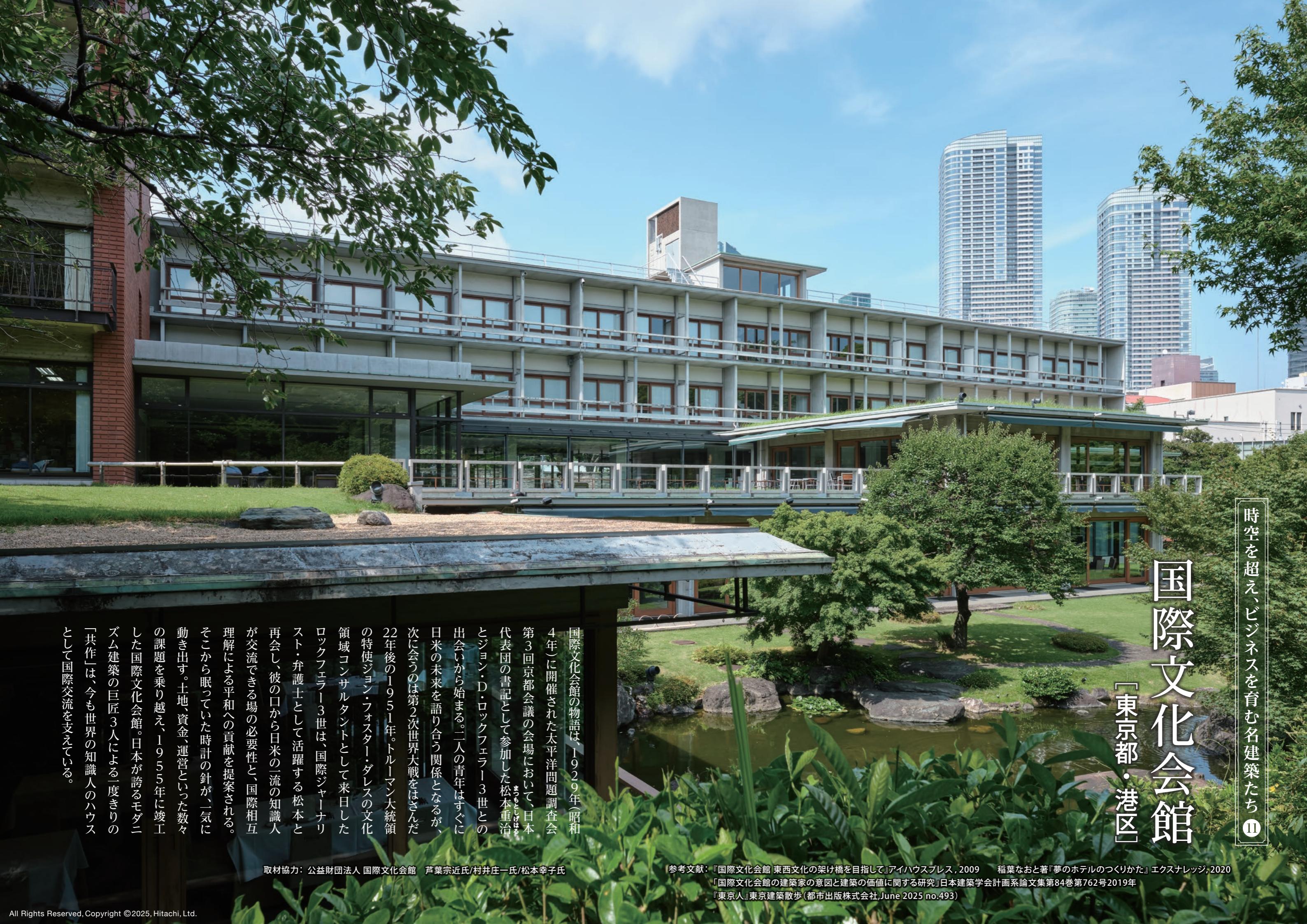


国際文化会館 「東京都・港区」



国際文化会館の物語は、1929年（昭和4年）に開催された太平洋問題調査会第3回京都会議の会場において、日本代表団の書記として参加した松本重治（あもとしげはる）と、ジョン・D・ロックフェラー3世との出会いから始まる。二人の青年はすぐに日米の未来を語り合う関係となるが、次に会うのは第2次世界大戦をはさんだ22年後の1951年。トルーマン大統領の特使ジョン・フォスター・ダレスの文化領域コンサルタントとして来日したロックフェラー3世は、国際ジャーナリスト・弁護士として活躍する松本と再会し、彼の口から日米の一流の知識人が交流できる場の必要性と、国際相互理解による平和への貢献を提案される。そこから眠っていた時計の針が、一気に動き出す。土地、資金、運営といった数々の課題を乗り越え、1955年に竣工した国際文化会館。日本が誇るモダニズム建築の巨匠3人による「共作」は、今も世界の知識人のハウスとして国際交流を支えている。

取材協力：公益財団法人 国際文化会館 芦葉宗近氏/村井庄一氏/松本幸子氏

参考文献：『国際文化会館 東西文化の架け橋を目指して』アイハウスプレス, 2009 稲葉なおと著『夢のホテルのつくりかた』エクスナレッジ, 2020

『国際文化会館の建築家の意図と建築の価値に関する研究』日本建築学会計画系論文集第84巻第762号2019年

『東京人』東京建築散歩(都市出版株式会社, June 2025 no.493)

日本モダニズム建築の

3 大巨匠による 唯一の共同設計



連続した柱と梁が作り出す、各部屋の深い軒先が特徴的なプレキャスト・コンクリート工法。



モダニズムを感じさせる屋上の旧機械室。



芝生の屋上テラスが、庭園へとつながる独特の空間を作り出している。



本館の3年後に増築された、庭園の池に張り出した釣殿式のレストランSAKURA。



劣化が進んでいた桧のサッシは、改修時にアルミサッシへの変更が検討されたが、コの字のアタッチメントを付けて複層ガラスを入れることで再利用が可能になった。



正面玄関の壁面には大谷石が使われている。

**戦前の名庭園と
モダニズム建築の調和**

空襲で荒れ果ててはいたが、元々この庭園は岩崎小彌太が『植治』こと京都の造園家7代目小川治兵衛に依頼したもの。それを、サンフランシスコ万博で日本庭園を作った後藤由松が建設時に再生した。国际文化会館は、高低差を生かしたこの庭園と、3人が学んだモダニズム建築との調和が際立つた特徴となっている。プレキャスト・コンクリート工法*による連続性を持つた柱や梁、白木の檜によるサッシ、屋上テラス

などの意匠は、庭園とのハーモニーが隅々まで計算されており、今も建築を愛する人たちの聖地となっている。

1955年に竣工した国際文化会館は、翌年の日本建築学会賞を受賞。2004年に建て替えを検討するが、その建築としての価値を再認識すべきだという多くの声が集まり、できる限り外観には手を加えず、内部を改修するという方法がとられた。保存・再生された国際文化会館は、2007年に2度目の日本建築学会賞を受賞。現在は国の登録有形文化財に認められている。

国際交流を目的とした文化センター設立のために、日米35名の準備委員会が発足したのは1951年のことだった。その時、4つの候補地の中から東京・麻布鳥居坂の岩崎小彌太邸跡地を選んだのは、常任理事の松本重治に同行した日本モダニズム建築の父アントニー・レーモンドだつた。土地の選定後、設計を誰に依頼するかについても検討していたところ、レーモンドから独自に基本設計を済ませていると松本に報告があつた。設計案に対し委員会から何度も修正を申し入れたが、くみ取つてもうえずレーモンドへの設計依頼は取りやめとなつた。

松本は、東京藝術大学初代美術学部長の村田良策に建築家について相談を持ちかけると、即座に3人の名があがつた。東京帝国大学の卒業と同時にシベリア鉄道でパリに向かい、ル・コルビュジエの日本人最初の弟子となつた前川國男。前川と入れ替わりでコルビュジエに師事し、

しかし、松本が3名を候補地に案内した数日後、思いもしない展開が待つていた。それは、3名による共同設計の提案だつた。理由は2つあつた。まず、競合で選ぶよりも時間とお金が節約できること。そして3人の設計を審査できる専門者が見当たらぬことだつた。それでも松本は、3人に設計案の提出を求めたが、三者三様で優劣がつけられない。建築家3名も、この建築は共同で設計したいと譲らない。最終的に松本は、個性豊かな3人が竣工まで協力して設計するという覚書を交わすことで、OKを出す。こうして国際文化会館の設計が始まった。



左から吉村順三、前川國男、坂倉準三。※



師匠であるコルビュジエの国立西洋美術館(世界遺産)の前に建つ、前川國男の代表作のひとつである東京文化会館。1961年日本建築学会賞作品賞及び第3回BCS賞を受賞。



坂倉準三の代表作である神奈川県立近代美術館旧鎌倉館は、大規模改修を経て鎌倉文華館・鶴岡ミュージアムとして利用されている。



坂倉準三が世界的な評価を受けた1937年のパリ万国博覧会日本館。



1955年に国際文化会館の設計で来日した建築家コルビュジエ。弟子の前川國男、坂倉準三の案内で国際文化会館を訪問。※

※写真提供:国際文化会館

国際文化会館ヒストリー

戦前の松本重治とジョン・D・ロックフェラー3世の出会いから22年後の1951年、二人は再会を果たす。ロックフェラー3世は、ダレス国務長官顧問が危惧していた、戦後の日本人の反米感情を抑えるという使命を帯びての来日だった。会食の場でその話を聞いた松本は、アメリカから超一流の知識人を招き、日本の著名な学者や文化人と交流する場を作ることを提案する。そんな国際的な知的交流が実現すれば、日本のアメリカへのイメージは確実に変わることになり、相互理解による平和への貢献も可能になる。

この提案が、日米の中板を動かす。ロックフェラー財団は、総額で4億円以上の助成金の交付を決定する。



準備委員会委員長の樺山愛輔と松本重治。樺山の次女は、読売文学賞を2度受賞した文筆家で、白洲次郎の妻である白洲正子。※



坂倉建築研究所(右上)や前川國男(下)が自らデザインした特製の椅子。



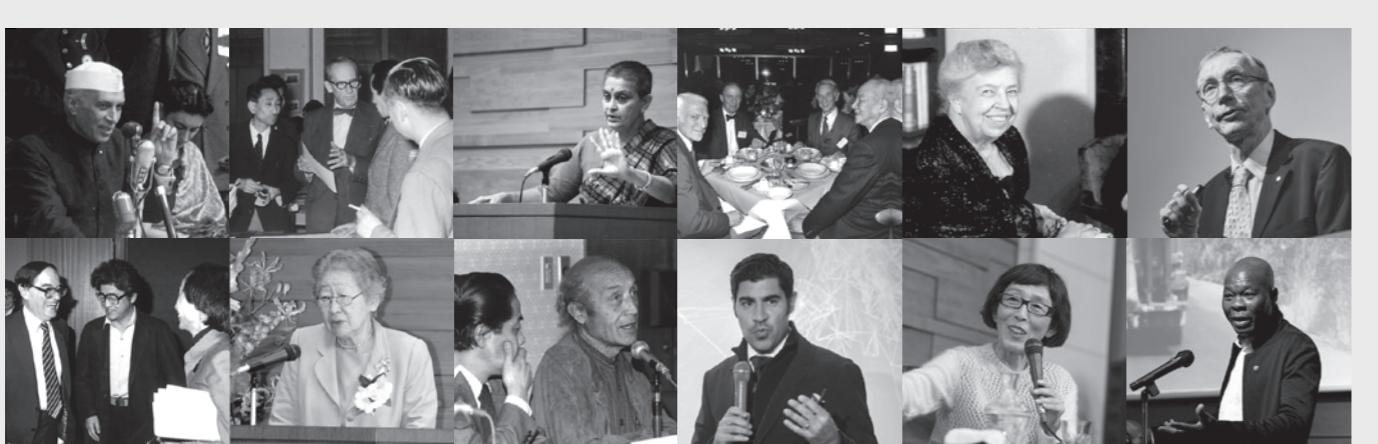
本館の全ての客室が庭園ビューとなっている。※



庭園を満喫しながら会食が楽しめるレストランSAKURA。※



日本および国際関係の英文出版物を中心に、約2万6千冊の書籍と約300タイトルの雑誌を取り揃えた図書室。※



これまで来館された著名な知識人。左上からネルー首相、ウォルター・グロビウス、ガヤトリ・スピヴァク(思想家)、ジョン・ホール／マリウス・ジャンセン／エドヴィン・O・ライシャワー／松本重治、エレノア・ルーズベルト、スパンティ・ペーボ、左下からドナルド・キーン／安倍公房／武満徹、緒方貞子、イサム・ノグチ、パラグ・カンナ、妹島和世、フランシス・ケレ。※



地経学研究所「カナダ・ブリティッシュコロンビア州首相、駐日カナダ大使セミナー」。※



国際文化会館の新しい価値を積極的に追求し、発信している近藤正晃ジェームス理事長。※

しかしそれには、日本側も1億円を集めている条件が付いていた。

準備委員会委員長の樺山愛輔は、この条件が電報で届いた翌日に大臣池田勇人を訪れ、国際交流の重要性を説く。同意した池田は、当時の秘書官だった宮澤喜一を用地の格安での払い下げ交渉へと動かす。

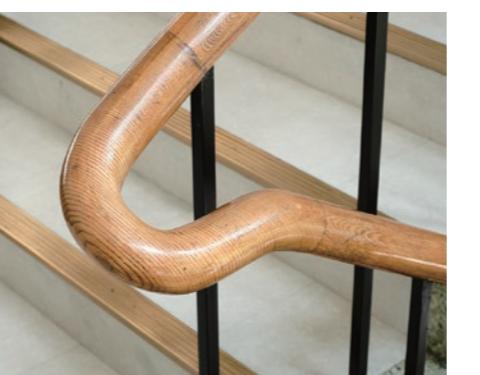
さらに樺山は、総理大臣吉田茂主宰の茶話会で、アメリカからの要望を説明し、参加者に募金をお願いする。

7千社を越える企業や一般市民からの募金が集まり、約束した期限の前日、ついに目標の1億円に到達した。

1953年8月のことだった。高齢にもかかわらず東奔西走した樺山愛輔は、設計の最終案を見ることなくその生涯の幕を下ろした。

アイハウスと呼ばれる 国際文化会館の活動

創設以来、学術研究者、芸術家、経済人、ジャーナリストなど各界で活躍する方々の活動拠点として利用されてきた国際文化会館。世界人権宣言の起草者であるエレノア・ルーズベルト、近代建築の父アルフレッド・ノーベル、



庭園を臨むことができる、本館の階段室。そして手が触れるところは木を使うという思想が貫かれた、握り心地のいい階段の手すり。



正面玄関を入ると、まばゆい屋上の芝庭と庭園の緑が迎えてくれる。

に2030年にはD-C川村記念美術館のマーク・ロスコのコレクションが移設され、SANAA設計の「ロスコ・ルーム」が誕生する計画も進行している。いまぐるしく変化する六本木に凜としてたたずむ国際文化会館には、国や時代を超えて持続可能な未来を考える、そんな知的な空気が今も流れている。

※写真提供：国際文化会館